

今年は4月例年になくお天気の日が続いただけに、5月からの雨量の多い、ぐずついた空模様には心も塞ぎがちだったが、6月になると、初夏の初々しい光線が、鮮やかな若葉の緑に映える季節になった。ビバの若者たちも、確かにこの季節に恥じない生命力を發揮し出した。5月、6月と若者たちは2つの大学で、自らの生い立ちを、臆することなく、まさにこの号の表題どおりに、精一杯に語ることが出来たのだ。

今号の表題は、朝日新聞、今年5月2日付に載った東京大学社会科学研究所教授の玄田有史さんの表現をお借りした。先生は私たちの若者自立塾を指導して下さる専門委員のお一人で、日ごろから私たちは先生の独自の視点からの発言に触発されることが度々あった。今回の発言は、「過去の失態や挫折経験をさすがしく語る。それをアカの他人が全身耳にして聞く。語るほうも聞くほうも元気になる。希望って案外、そんなところから生まれるんじゃないかな。」とつながっている。

5月20日、北海道医療大学の佐々木明員准教授（北星学園大学社会福祉学部卒）ご担当の「当事者論」講座（専門課程3学年47名）にお招きを受けた。私はビバハウスの概略をスライドも使用し、簡略に説明をし、主要な時間（約45分）を、まさに「当事者」である、兵庫県出身、25才のR子さんに受け持ってもらった。私からの依頼をきっちりとした決意で受け止めてくれた彼女は、事前に何度も何度も文章を書き直し、当日に備えてくれた。R子さんは、過去数年間で5回ビバハウスでの生活に挑戦し続けた経過を持つ。そうしてついに昨年の10月、継続的に診察を受けてきた姫路市で神経内科診療所を開設されている森下先生から、「ようやく原点にたどり着きましたね。あなたはこれからはビバハウスで十分頑張れるところまで回復しましたよ。良かったですね。」と激励を受けたとのことだ。まさにこれまで半年以上の彼女の生活は、私たちも心から尊敬する森下先生のお言葉通りだった。（森下先生については、ビバハウス便りNO.47を見てください。尚先生は現在ご病気と伺っています、1日も早い全快をお祈りいたします。）

R子さんは、自らの小学生時代から友達と同化できず常に孤立感に悩まされ、その自分の苦しみを理解してくれない両親とも常に敵対的な関係に立たざるを得なかった辛さを、最後には母親と髪の毛を引っ張り合いながら喧嘩までし続けた過去を、身じろぎもしない決然とした態度で語りきった。そして最後に森下先生の導きで、ビバハウスにたどり着いた喜びで締めくくった。47名の学生さんたちも、まさに水を打った様な緊張と静寂の元に、一言も聞き漏らさないという姿勢で、彼女を全身で受け止めてくれた。話し終わった後での2人の学生さんからの質問もまさに問いただしたい、的を撃つものだった。R子さんも的確に回答し、教室中にさわやかな緊張感と安堵感があふれた。これが学び合うということだと思われた。まさにここにこそ「希望」が湧く地盤が作られているのだと確信した。

6月3日には、R子さんと共に札幌出身K君23歳も北星学園大学の学生さん80人の前でお話をした。K君は小学校の5年生までしか、学校に通えなかった青年だ。（次号へ）